

禅の友

Zen no Tomo

9

September 2025





ご本山だより

大本山永平寺

【高祖大師御征忌】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



毎年九月二十二日から三十日にかけて、「高祖大師御征忌」が厳修されます。

九月二十九日に道元禪師さまのご命日を迎えるにあたり、一週間をかけてご供養を申し上げます。

とても大きな行事なので修行僧だけでは対応できません。全国から多くの僧侶が駆けつけ、受付や食事作り、参拝者のお世話などをともに行っております。また、各地のご住職さまが多くの檀信徒を引率して上山し、坐禅をし、読経をします。正に僧俗を問わず、道元禪師さまを慕う皆があつまって報恩の行をともに務めていくのです。

『建擧記』という道元禪師さまの伝記があります。遷化後およそ二〇〇年後にまとめられたといわれているその書物の中には、入滅を間際にされた時の道元禪師さまのご様子が書かれています。

ます。

その日、道元禪師さまは病床にて経行（歩く坐禅）をしながら『妙法蓮華經如来神力品』の一節をお唱えになつたそうです。その内容を簡単にまとめるとこの様になります。「たとえ林中であろうと、山の谷間や広野であろうと、坐禅堂だろうと、在家信者の方の家だろうと、今いる場所こそが道場である」。

命が尽きるその時まで修行をするのだと、自らお示しくださつた道元禪師さま。今から七七〇年前のちようど今、道元禪師さまは一步一步を確かに踏みしめていらつしやつたのか。そのお姿を思いながらこの法要に参加する時、報恩感謝の念がとめどなく湧き上がるのです。



ご本山だより

大本山總持寺【両祖忌】と【秋彼岸】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二



三松幼稚園 園児・祖父母による焼香

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉どおり、大抵彼岸を境に少しづつ涼しくなってくる時期ですが近年、温暖化のせいも九月でも猛暑の日も多いように感じます。

秋が深まると日が暮れるのが早くなるため、夜が長い月という「夜長月」が略されて九月の異名が「長月」となったそうです。樹木に囲まれている總持寺でもその木々の間を通ってくる涼風が少し感じられるようになってまいりました。

九月は曹洞宗では特に大切な法要が営まれます。それが「両祖忌」なのです。両祖とは「お二人の祖師」ということです。

そのお一人は道元禪師です。

道元禪師は中国（宋の時代）に渡り禅の教えを学び、帰国後京都、のちに永平寺においてその教えを広めました。

もうお一人は瑩山禪師で道元禪師から四代目の方で阿波の城満寺や石川県羽咋市の永光寺として当時石川県にあった總持寺を開き道元禪師から継承した正法を広めると共に、沢山の弟子を育成しました。その教えは多くの弟子によって全国に広がり、現在の曹洞宗の基盤となったのです。この大切な祖師方の遺徳と御恩に感謝して営まれるのが九月二十九日の「両祖忌」なのです。

また九月は秋のお彼岸でもあります。ご先祖さまを供養すると共に自分自身に反省を加え、六波羅蜜とされる六つの善き行いの種蒔きをする修養期間なのです。總持寺では秋分の日の前二日間の一週間（本年は九月二十日～二十六日）、大祖堂に於いて秋季彼岸大施食会法要が行われます。先祖を想い、供養するために檀信徒や参拝者の方々が集って法要に参加いたします。

選・坊城俊樹

宙を蹴る赤子の力夏の月

島根県 金山 陽

評 これはまた力強い赤ちゃんではないか。あたかも夏の月による引力を蹴飛ばしてやろうかという気迫すら覚える。そしてこの光景もまた幻想的で素敵である。きつとこの子は大きくなって何にも負けない気概と想像力を持つ大人になるのであろう。

逃水の向かうに逃げぬ水のあり

愛知県 後藤 美帆

評 この句の二重の構造はなかなか新鮮。夏の逃水とはゆらゆらと地の果てを逃げて行くように見える。しかしよく見るとその先の果てには逃げない逃水があるように感じた。いや本当にそんな景色が見えたのかも。こんな幻想風景を描写した句は初めて。

◆ 聖堂に懺悔の小部屋五月闇

秋田県 伊藤剛司

◆ おくれ毛に滴したたる洗ひ髪

兵庫県 松井弘子

◆ 歳時記の編者逝くなり桃の花

神奈川県 佐野 勇

◆ そそろ歩く梅雨の蝶々道づれに

岩手県 阿部 潔子

◆ 梅雨ふかし広げたままの用語辞書

三重県 荻屋 奈良美

◆ 流燈の広げる闇の余白かな

大阪府 柏原 才子

◆ 池底の影すべりをり水馬

宮崎県 石濱 徹

◆ 献血はこれで最後や梅雨に入る

山口県 稲村 みどり

◆ 湯の宿の輝く蛇口夏兆す

埼玉県 伊藤 博

◆ 穏やかに老ゆるは難し桜雨

東京都 松本 キヌエ

選者吟

夕焼けを落ちてしまひし夕陽かな 俊樹

作句小見

この句は三十年も前のものか。真つ赤な夕陽が日没ともんだんだんと沈んでゆく光景。よく見ると夕焼けに染まった夕陽がやがて落ちて消えていってしまった。自分でこしらえた夕焼けに溺れてゆくような夕陽の壮大な景色を諷詠したかった。

選・長澤 ちづ

雨上がりの宮の境内しんとして神の落とせしかたつむりひとつ

兵庫県 佐伯 幸子

評

シーンとした神社の境内に入ると神聖な気持ちになる。雨上がりなら猶更のことだろう。日常空間とは違う空気を捉えた四句目の表現が「かたつむり」の存在を生き生きとしたものにした。

霧のごとポプラの絮毛浮遊する夕べは亡夫に会へる気がする

北海道 加藤 智子

評

ポプラも柳絮と同様に絮毛がとぶということを南国に住むものは教えられた。ポプラ並木が身近な作者らしい眼差しで亡き人を偲んでいるところに詩情を感じた。

◆ 丸太積み込みしクレインの鉄爪に杻父の肩の隆起顕ちたり

三重県 西村 廣視

◆ この空の青さに紛れさえずりのシャワーを降らせ続ける雲雀

埼玉県 白藤 巳玲

◆ 子の墓の落葉掃かむとかがまれば蛇のひげの実のつややかな照り

広島県 徳永 進一郎

◆ 子らの声遠くになりて茶畑に番の雉が餌を啄ばみぬ

静岡県 又平 幾世

◆ 他人の手に渡りてしまひし屐敷跡に雨に滲みて露草咲けり

岩手県 阿部 照子

◆ 愚かにも疑ひもちし悔ひ一つ捨てどころなく時雨に濡るる

鳥取県 徳本 義則

◆ あふるがにどうだんつつじ咲いてます母に会いたし母の日近し

岡山県 塚本 登志子

◆ 舞ひ込みし木の葉一枚床にあり医院の内も秋深まりぬ

岐阜県 後藤 進

◆ 家族五人まかなう野菜畑隅に揃えて埋けつ冬越しのため

岩手県 宍戸 さとる

◆ 仏壇の抽斗に眠る黄泉行きの片道切符の欠伸聞こゆる

兵庫県 前田 あつ子

選者誌

幾十もコンテナ載せて走りゆく機関車の孤独に
花降りそそぐ
ちづ

作歌小見

西村さんの一首の二句目から三句目の句跨りは亡き父の労働の大変さを際立たせています。徳本さんの四句目「捨てどころなく」阿部さんの四句目「寒風浴びて」にベテランらしい味わいを感じました。